

『バガヴァッド・ギーター』の行動倫理

—行為肯定 (pravṛtti) と行為否定 (nivṛtti) との調和 の構造—

福田 慎子

(和文要旨)

先行研究において『マハーバーラタ』の倫理的見地として「行為肯定の倫理」「厭世主義」「行為否定の倫理」「調和の立場」が示されている。これらを成立させているのが業報の思想である。そして、調和の立場を明示するのが本論で取り挙げる『バガヴァッド・ギーター (BhG)』とされている。社会生活の維持に不可欠な行為肯定の立場 (pravṛtti) と、業の束縛を形而上学的な認識によって脱し精神の自由を求める行為否定の立場 (nivṛtti) とを同時に成立させているのが調和の立場である。本論では、まず調和の立場の倫理構造 (調和の構造) を「厭離と平静の二観念を土台とした行為の実行」として見出し、次に BhG 本文中で厭離と平静とが業 (行為) を基軸にどのように表れているのか検討した。業の克服が理想である行為否定の立場において、業を離れることを「厭離」、既に業を離れた境地を「平静」とした。精神を束縛する厭離の対象となっているのは万物の物質的な根源から生じる三つのグナであり、グナが人を善悪の行為に駆り立てる因でもある。この影響を断ち平静を得るにはヨーガ (心統一) が補助をなす。平静の境地は平等観および一如観の語によって表わされる。グナを厭離し、平等観に安立して行為することが BhG の行動倫理に表れている。

(SUMMARY)

Four viewpoints are found in the ethics of the *Mahābhārata*. They develop, based

on the idea of Karma-effect, from the viewpoint of worldly affairs to the viewpoint of monkhood—a viewpoint that negates and transcends worldly affairs. It is the viewpoint of harmony that realizes, at the same time, both the viewpoint of worldly affairs (pravṛtti) and the viewpoint of monkhood (nivṛtti). In this paper, I take the ethical structure of the harmonious viewpoint to be worldly action grounded on the two ideas of Onri (厭離; renunciation) and Heisei (平静; calmness). I examine how the ethical structure of the harmonious viewpoint appears in the *Bhagavad-Gītā*, which is known as a condensed representation of the *Mahābhārata*. Harmonious action, after the Onri has become free from the objects that bring spiritual bondage, is made in the mind of Heisei. The objects of Onri are the three guṇas that constitute the material source of all things and the causes that make people act rightly or badly. The ways of yoga help to cut out the effects of guṇas and acquire Heisei.

はじめに

『バガヴァッド・ギター』(Bhagavad-Gītā 以下, BhG と呼ぶ)¹は、インドの叙事詩『マハーバーラタ』(Mahābhārata) に属する一詩編である。『マハーバーラタ』は、戦争譚を主軸として、その他多数の神話・伝説・物語を包含し、当時(世紀前 200～後 200 年の間に大体成立し、400 年頃に現形が確定。BhG の

¹ 本論では、Pandit Ramchandrashastri Kinjawadekar(edited by): *The Mahābhāratam with the Bharata Bhawadeepa Commentary of Nīlakaṇṭha*. Oriental Books Reprint Corporation, New Delhi, 1979, 第 6 巻, 第 25～42 章所収の『バガヴァッド・ギター』を用いる(以降キンジャワデーカル本と呼ぶ)。翻訳は拙訳を用いる(呼格は省略)。訳に当たっては、キンジャワデーカル本付属のニーラカントの註釈(N 註)および辻直四郎『バガヴァッド・ギター』(講談社, 昭和 55 年), 上村勝彦(訳)『バガヴァッド・ギター』(岩波文庫, 1992 年)を参照した。なお批評版(ブーナ版)がテキストとしては新しいが、これを用いないのは、批評版が多くの写本をつなぎ合わせ、「曾て存在しなかった一伝本を作り上げたに過ぎ」ず、「校訂が機械的に過ぎたために文脈の中断する場合もあり」、「善本とは言いがたいもの」(岩本裕『ラーマーヤナ』東洋文庫 376, 平凡社, 1980 年, 232 頁)という指摘が『マハーバーラタ』批評版にも該当するためである。N 註をとるのは、それが一貫した伝本であるキンジャワデーカル本の全編を通して註記してあるからである。ただし、場合によっては他の註釈も参照する。

訳における()内は語の説明, []内は語を補ったものである。テキストには詩節(偈)の所在を示す偈番号(巻.章.節)または(章.節)が付されている。

年代もこれが適用される) の法律・政治・経済・社会制度を窺い知ることのできる無尽蔵の資料を有し、さらに当時の民間信仰・通俗哲学も伝えている²。この『マハーバーラタ』全 18 巻の中でも、第 6 巻 BhG (25~42 章) はインドの民衆に最上の聖典として重んじられている。本論は、複雑多岐にわたる『マハーバーラタ』の思想について倫理的観点から検討を試みる。その理由としては、『マハーバーラタ』の哲学説が非常に倫理的な内容を示し、また、『マハーバーラタ』の倫理思想を専門に取り扱った研究が本邦において非常に数少ないということが挙げられる。『マハーバーラタ』の倫理を取り扱った先行研究として今のところ以下の論稿がある。

1) 金倉圓照「インドの倫理—インド倫理思想の変遷—」『インド学仏教学研究Ⅲ インド哲学篇 2』(春秋社, 昭和 51 年, 5~101 頁)。以下, 金倉「インドの倫理」と略称。

金倉は、インドの倫理に関して「全体にわたる著述は未だ十分に行われていない。かような事情の下では、個々の問題についての特殊研究を参照しつつ、一貫した条理を自ら考案するの外、方法が存しない」³という。また「マハーバーラタの倫理思想の如き、従来我が学界に問題とせられたことがない」⁴という。この論稿が書かれたのが昭和 16 年、再訂が昭和 48 年である。現在、仏教その他の倫理⁵については多数の著述がある。しかし、管見の及ぶところ『マハーバーラタ』の倫理を扱ったものに関しては、

- 2) 中村了昭「大叙事詩の解脱法品にあらわれる行動主義の倫理」(成田山仏教研究所紀要『仏教思想史論集』第 11 号, 1988 年, 743~490 頁)
- 3) 同「叙事詩に記載される庶民生活の倫理」(成田山仏教研究所紀要特別号『仏教文化史論集 I』第 15 号, 1992 年, 205~224 頁)
- 4) 同「叙事詩にあらわれる行為否定の倫理」(宮坂宥勝古希記念論文集『インド学・密教学研究』1993 年, 131~157 頁)

² 中村元『インド思想史』(岩波書店, 1956 年) 97 頁参照。

³ 金倉「インドの倫理」101 頁 4~6 行目。

⁴ 金倉「インドの倫理」100 頁 10 行目。

⁵ BhG の倫理と仏教など他の思想との関連のもと考察された例は散見される。

西尾秀生「バガヴァッド・ギーターの倫理と仏教」(『日本仏教学会年報』第 47 号, 1983 年, 1~14 頁) など。

5) 中村元 (編) 『インドの倫理思想史』 (学藝書房, 昭和 38 年) における,
中村元「バラモン教の倫理思想」および勝呂心静「インド教の倫理思想」

6) 原実「KṢĀTRA-DHARMA (上) —古代インドの武士道—」 (『東洋学報』
第 51 号, 第 2 巻, 1968 年, 1~34 頁)

同「KṢĀTRA-DHARMA (下) —古代インドの武士道—」 (『東洋学報』
第 51 号, 第 3 巻, 1968 年, 1~37 頁)

同「KṢĀTRA-DHARMA (ADDENDA) —古代インドの武士道—」 (『東
洋学報』第 51 号, 第 4 巻, 1969 年, 1~10 頁)

があるのみで, なお研究開拓が必要である。本邦で研究が進まないのは, 『マハーバーラタ』の完訳が現時点で完成していないこと, また『マハーバーラタ』の思想自体が複雑であることが理由として挙げられる。なお, BhG に関する著述において倫理を中心に扱ったものも未だ僅少であると言わざるを得ない⁶。

本論の考察方法においては, 考察材料の証拠提示のために索引⁷における該当箇所を示す。これは論拠となる材料 (用例) を委細漏らさず確保し, 関係する用例のごく一部から結論を導き出す過誤を避けるためである。そのため, 論述の根拠となる語に 〈 〉 を付し, 索引において見出し得る限りの, その語の用例に關係する偈番号を【 】に入れて註に置いた。索引を用い, 考察項目に関する全用例を網羅していく方法を以後, 索引方式と呼ぶ。索引方法はテキスト内に考察材料が広く散在する, BhG をはじめとする先古典期の思想の考察に適

⁶ BhG はそれ自体, 行為に関して説くので, 註釈の解釈読解を専門とするもの以外, 大局的に見ればすべて倫理の範疇に入ると思われるが, 倫理的観点の下に扱った論文としては次の著述が挙げられる。

外菌幸一「一神教的有神論の倫理: バガヴァッド・ギーターにおける倫理観」 (『鹿児島経大論集』第 36 号第 3 巻, 1995 年, 69~108 頁)。

瀬古康雄「初期ウパニシャッドの形而上学とバガヴァッドギーターの倫理: インド思想の形而上学の基本的性格について」 (『島根女子短期大学紀要』第 21 号, 1983 年, 121~130 頁)。

湯田豊「バガヴァッド・ギーターの倫理思想」 (『人文研究』第 78 号, 1981 年, 43~65 頁)。

山本和彦「『バガヴァッド・ギーター』における悪について」 (『佛教学セミナー』第 71 号, 2000 年, 127~99 頁)。

⁷ 中村了昭 (編) 「バガヴァッド・ギーター総索引 (I)」 (『鹿児島経済大学社会学部論集』第 18 巻, 第 2 号, 平成 11 年) 59~101 頁。

同 (編) 「バガヴァッド・ギーター総索引 (II)」 (『鹿児島経済大学社会学部論集』第 18 巻, 第 3 号, 平成 11 年) 69~92 頁。

同 (編) 「バガヴァッド・ギーター総索引 (III)」 (『鹿児島経済大学社会学部論集』第 18 巻, 第 4 号, 平成 12 年) 31~53 頁。

していると考えられる。BhG は、ほとんどすべてのインド思想の傾向をそこに発見し得る『マハーバーラタ』の縮図と称される⁸。BhG の倫理を把握することは『マハーバーラタ』の倫理全般を俯瞰する地図を手に入れることになるだろう。

本論では、先行研究によって示されている『マハーバーラタ』の四つの倫理のひとつ、調和の立場の倫理構造を把握し、これが BhG にどのように表れているのか検討する。BhG に関しては、既にその内容は周知されていると思われる。しかし、考察項目に関する全用例を網羅していく方法で検討していくことは、既存の研究でも未だ試みられていない。なにより、行為の在り方が教説の主題となっている BhG は、倫理的観点からも重要な価値をもつものと考えられる。BhG の検討を通してインド倫理の「一貫した条理」の解明に僅かでも貢献できれば幸いである。一貫した条理とは、要するにインド人が古来より重んじてきた行為の規範の根幹を成すものと考えられる。

1. 『マハーバーラタ』倫理の観点

通常、倫理の考察というと、哲学的な思想に関知しないもののように受けとられる可能性がある。しかし、インドの思想は、哲学、倫理、宗教といった学問の分野に明確に分離して捉えることはできない。ダルマの一語によって言い表されるインドの思想は、人々の慣習、形而上学的な認識、神への信仰が渾然一体となって形成されているのである。従って、倫理の考察とはダルマの考察に他ならない。このような状況にあるインドの倫理思想について金倉は、「人の行為の規範に関する思想」⁹としている。人の人に対する行為である。但し、インドでは神々もしばしば偉大な人間と考えられている場合があるため、神々の間柄も倫理思想の範囲として考慮に入れるべきだとする。BhG は、「Bhagavad（至尊）」と呼びかけられる神（クリシュナ）が、対話相手である人間（アルジュナ）に対して行為とはどうあるべきかを説く。これを簡潔に表現するならば、

⁸ 金倉「インドの倫理」93頁参照。

⁹ 金倉「インドの倫理」9頁1～2行目。

神に信仰 (bhakti 敬信) を捧げて自己の義務を果たすように説く内容である。要するに、神の教示する、人が神に信仰を捧げて行う行為であるため、宗教思想と倫理思想が融合した教説と言える。

『マハーバーラタ』における倫理的見地について金倉は、「現実肯定の倫理」「厭世主義」「現実否定の倫理」「調和の立場」の四つに分けて示している。四つの倫理的見地のうち、調和の立場を明示するのが BhG であるとされている。本論では「現実肯定の倫理」を「行為肯定 (pravṛtti) の倫理」, 「現実否定の倫理」を「行為否定 (nivṛtti) の倫理」と称する¹⁰。調和とは行為肯定と行為否定の立場を両立させる立場である。BhG においても「行為せよ」「行為を放棄せよ」という一見矛盾する立場が諸所に説かれ、細かく考察しようとするほど、両立場について予め把握しておく必要が生じる。以下、両立場の特徴と調和の立場を成立させる構造 (調和の構造) を見ていく。

1-2. 『マハーバーラタ』の倫理における調和の構造¹¹

行為肯定の立場の明白な表示は、社会生活の根底として、家庭生活を重要視するところにある。西洋でも倫理の語が慣習 (ギリシャ語 ethos ないしは ēthos, あるいはラテン語 mores) という語に起源を持つように、インドでも社会の慣習は良俗であり、また掟であって、それに反すれば、道德を破ることとなる。その社会は、学問や祭祀を司るバラモン (祭官階級)、戦争や政治に当たるクシャトリヤ (王侯・武士階級)、農商工を生業とするヴァイシヤ (庶民階級)、被征服民族を起源とするシュードラ (奴婢階級) の四姓で構成されている。そして、再生族 (バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ) の生涯は、師についてヴェーダを学習する学生期、次いで家に帰って家長としての義務を果たす家住期、嗣子を得て祖先の祀りの絶えないことを期した後、家住期を去って、林間に棲み、世の煩瑣を避けて哲学的冥想に専心する林棲期、さらに一所不住の遊行生活に入る遊行期の四時期 (四住期) に分かち、これらを順次に経過するのが一生涯

¹⁰ 中村「叙事詩にあらわれる行為否定の倫理」131頁参照。

¹¹ 本節の記述は、金倉「インドの倫理」、中村「大叙事詩の解脱法品にあらわれる行動主義の倫理」、中村「叙事詩にあらわれる行為否定の倫理」を参照している。

の最も正しい生き方、換言すればダルマ（dharma）に適った生き方であるという認識がある¹²。このダルマ（漢訳「法」「達磨」）は、インドの倫理思想で非常に重要な観念を示すものである。四姓、四時期それぞれに法が確立する。一言にして言えば秩序であり、慣習を守るという意味から、この語が義務の意味に転用された。そして法に対して非法の観念が対峙する。

『マハーバーラタ』においては、四時期の中でもとりわけ家住期が重視され、「家住は一切の法の根本である」（12.191.10）あるいは「四時期は家住を基本となす」（12.334.26）と説かれている。要するに、行為肯定の倫理は家住期における倫理であり、家住期における各四姓の義務がこれに当たると考えられる。家住期に限らずインド人の生涯は、祭祀（祭式）と密接に結びついている。また、法（ダルマ）・利（アルタ）・愛（カーマ）の実践の場がこの家住期である。

次に行為否定の立場は、行為肯定の立場に対立する形で、厭世主義¹³を媒介として成立する。別の表現をすれば、活動（有作）の立場から、厭世観の思考によって、無活動（無作）の理念が展開するのである。人は行為（業）によって束縛され、哲学的認識によって解放される。真の聖者は、無作の倫理に安立した者として、『マハーバーラタ』の諸所に描き出されている。即ち、形而上学的な認識によって業の法則を克服した者である。ここにおける認識には、『マハーバーラタ』の哲学説が関係する。その代表として「サーンキヤ、ヴェーダーンタ、ヨーガ」が挙げられる¹⁴。そして、認識によって到達し得るとする理想、即ち物質の束縛を離れた靈性の自由、このような理想を実現しようとするのが、行為否定の倫理の特徴である。そして、林棲期と遊行期がその実践の場である。四つの立場およびそこにおける倫理を区別し、順次に各立場を導き出す役割を果たすのがインド古来の業報の思想である。この場合の業報の思想とは、善悪に関わらずすべての行為（業）は、その結果（業果）が現今の生を越えて他の

¹² 『マハーバーラタ』哲学編のうち、解脱の法を説く第12巻モークシャダルマ品は、第174章からはじまるが、その174章で論題とされているのが、「四住期にある者の最上の法とは何か」（12.174.1）である。中村了昭『マハーバーラタの哲学—解脱法品原典解明（上）—』（平楽寺書店、1998年）3頁。本論の第12巻の引用は特に明示しない場合、同書による。

¹³ 厭世主義とは、業の束縛を受け「時（kāla 12.279.17）」や「運命（vidhāna 12.181.8；adrṣṭā 12.206.20）」などに抑圧された感情を基礎とする人生観をいう。

¹⁴ 『マハーバーラタ』には、後に古典体系として結実する以前の哲学説（先古典体系）が保存されている。中村了昭『サーンキヤ哲学の研究』（大東出版社、昭和57年）139～140頁参照。

生にも及ぶというもの（業報輪廻説）で、『マハーバーラタ』では原因と結果について、精密な連絡が推定されるようになった。特に、行為肯定と行為否定の倫理は、業の理論を軸にその重んじる観念が対極に位置しているのが特徴的である。それは四時期の経過に顕著に表れている¹⁵。家長期における行為を肯定する立場が、厭世観により行為が自己を輪廻に束縛する厭うべきものと認識され、林棲・遊行期では行為の作用を止滅する無作が求められる。衣食住のいかなるものにも貪著しない無所得、平静冷淡を重んじる行為否定の倫理とは、業果を生じる行為そのものを離れることに関係していると考えられる。

しかし、行為は社会生活を維持するため必要とされ、行為否定の立場にある出家修行者たちの寝食の保障も行為肯定の立場にある者がいてこそ保たれるものである。無作を求めて完全に行為を捨てては生物としての生存も危うくする。それ故に、行為を行っても行為否定における理想（業の束縛からの離脱）を実現する調和の立場が求められるのである¹⁶。

以上、『マハーバーラタ』の倫理的見地を挙げた。BhGにおいて調和の構造の例は、第2章と第6章に次のように説かれている。

ヨーガに安立し、執着 (saṅga) を放棄して、成功・不成功に平等 (sama) となって行為を実行せよ。平等観 (samatva) がヨーガと言われる。(2.48)
厭離 (saṁnyāsa) と呼ばれるもの、それをヨーガと知るべし。なぜならば、意欲 (saṁkalpa) を厭離しない者は、どの人もヨーガ行者となることはないからである。(6.2)

ヨーガに登ろうと願う牟尼にとって、行為は手段であると言われる。すでにヨーガに登ったその者にとって、平静 (śama) は手段であると言われる。(6.3)

このようにヨーガが定義されている（その他の例 6.23）。BhGにおけるヨーガの指す内容の多様さにより、意趣を取り難いが、上記の用例におけるヨーガと

¹⁵ これについて中村は「正統バラモン体系の中には矛盾した命題がある。すなわち、供犠は家長期におけるもっとも重要な行為のひとつであるが、遊行期には禁止されている。この矛盾は家長期・遊行期という時間的に異層の独立した慣習として一応是認される。しかし、人生に統一の見解を求めようとする意識の発達につれて、検討が加えられるのは当然である。この問題は家長期と遊行期の優劣という形でなくて、倫理的な pravṛtti と nivṛtti, karmavidhi と jñānavidhi の比較という形で究明されることになる」と指摘する。中村「大叙事詩の解脱法品にあらわれる行動主義の倫理」136頁参照。

¹⁶ また金倉は「真実の調和」について述べている。金倉「インドの倫理」85頁参照。

は、行為において「執著」「意欲」を離れることによって、「平等」「平静」に安立するという構造が見て取れるだろう。そして「ヨーガ」とは「行為（業）の束縛を断つ」（2.39）ものとなっている。業の克服は行為否定の立場における理想である。BhG では平等観（*samatva*）また厭離（*saṁnyāsa*）と称されるヨーガが、調和の立場を表していることがわかる。今後、考察に際し、このように何かを離れることを「厭離」、それによって安立する境地を「平静」とする。この厭離と平静とを具えて行為を実行することが調和の構造である。厭離と平静という二つの観念と、サンスクリット原文の訳語である厭離と平静とを区別するために、訳語にはローマナイズした原語を付記する。

「行為」（2.48, 6.3）の内容について、第2章ではサーンキヤの哲理に則り諸感官を抑制する心統一（ヨーガ）法に立脚し、クシャトリヤの義務を実行することが説かれ、第6章では諸感官を抑制する心統一法を実行することが説かれている。また、2.48 では心統一法が、義務の実行の前提となっていることがわかる。金倉は行為否定の立場にある遊行者には、調和の立場に見られるような否定と肯定との立場上の調和は見られないと述べている¹⁷が、調和の構造に関しては、そのような立場上の限定は受けない。上記の通り、有作なるクシャトリヤの義務行為（行為肯定の立場）であれ、無作を求める心統一法の行為（行為否定の立場）であれ、肉体を用いる限り業の生じる可能性はある。それ故、調和の構造は、両立場の行為全般に通用するものだろう。また、業を離れようとする厭離の有無は、行為否定の立場における倫理を保っているか否か（外形のみの偽善的な行為か、真の善行為か）を識別する指標となるだろう。その倫理の実行によって業の束縛を離れきった境地が平静である。

しかし、精神の束縛を脱するという目的を達成した後、利己心を離れた行為の積極性はどこに求められるのか。金倉は「否定の倫理そのものの根底に、積極性が潜んでいると解すべきである」¹⁸と記すのみである。このことは上記の行為否定の立場における疑問として残される。厭離と平静の観念についてまとめると次のようになる。

¹⁷ 金倉「インドの倫理」86頁9行目～12行目。

¹⁸ 金倉「インドの倫理」83頁7行目。

(1) 厭離とは、業の束縛から離脱しようとする事。つまり、業果を生じ、精神の自由（輪廻からの解脱）を阻害する対象から離れること。善と偽善とを峻別するもの。

(2) 平静とは、厭離により業の束縛から解放され、解脱を得た安静の境地。

次に、業を基軸として、厭離と平静の二観念が BhG 全編においてどのように表れるのか検討する必要があるが、以下ではその主要なものに限って用例を見ていく。

3. BhG における厭離と平静

人の行う行為（業）には、必然的に行為の結果（業果）が生じる。行為肯定と行為否定の立場を調和する BhG の行動倫理では、これをどう克服するのが問題となる。先述した通り、厭離とは、業果を生じ精神を輪廻に束縛するものを去ることである。BhG で輪廻の状態にある精神（即ち、個我）は、さまざまな名称で呼ばれている¹⁹。個我は、精神の本源「純粹精神 (puruṣa)」と物質の本源「根本原質 (prakṛti)」これらの二元の本源となっている至尊の「一部分 (amśa)」

(15.7) とも説かれている。これは『マハーバーラタ』において各種の類型が見られるサーンキヤ説のうちの「第 26 諦のサーンキヤ説」である²⁰。要は精神が輪廻にあるか否かに相違がある。輪廻にある個我は根本原質への執著性があるために解脱できない²¹。この個我を束縛するものとは何か、次のように説かれている。

サットヴァ (sattva 純善), ラジャス (rajas 激情), タマス (tamas 癡闇)
 という根本原質より生じる〔三〕グナは、不滅の個我 (dehin) を肉体に束

¹⁹ 「デーヒン (dehin)」「シャリーリン (śārīrin)」「アートマン (ātman)」「プルシャ (puruṣa)」「生命我 (jīva)」「自在主 (īśvara)」その他。

²⁰ 第 26 諦とは、「純粹精神 (25 諦)」「未顕現 (根本原質, 24 諦) → 大 (覺, 知性) → 我執 → 五元素 → 十一感官 (意, 五知根, 五作根) および五境 (声, 触, 色, 味, 香)」(12.310.10~15 の第 25 諦説の例) この 25 諦と 24 諦を保持する「自在主 (īśvara)」を置く類型。但し、自在主を第 26 諦として計挙に入れる場合と、入れない場合がある。第 26 諦説の特徴はヨーガ思想と結合している点にあり、宇井によって「Sāṃkhya-yoga」と名づけられている (中村『サーンキヤ哲学の研究』170~179 頁参照)。

²¹ 中村『サーンキヤ哲学の研究』178 頁参照。

縛する。(14.5)

このように、グナが個我を束縛する原因となっており、これを厭離の対象として挙げるができる。この〈グナ〉²²については、次のようにも説かれている。

その中で、サットヴァは無垢であるために、光輝あり、病患なく、楽(sukha)への執著と知(jñāna)への執著によって〔個我を〕束縛する(14.6)。ラジャスは貪欲(rāga)を本性とし、渴愛(trṣṇā)と執著(saṅga)とを生じるものと知るべし。それ(ラジャス)は、行為への執著によって個我を束縛する(14.7)。しかし、タマスは無知より生じ、すべての個我にとって迷妄をもたらすものと知るべし。それ(タマス)は、放逸・怠惰・睡眠によって〔個我を〕束縛する(14.8)。サットヴァは、楽に執着させ、ラジャスは行為に〔執着させる〕、しかしタマスは、知を覆って放逸に執着させるのである(14.9)。

また、「グナとの接触が、その善悪の胎に生まれる〔輪廻の〕原因」(13.21)となっている。このように個我に執著をもたらし、輪廻の原因となっているのがグナである。

さて、倫理を論じる上では、人の行為における善悪が問題となる。〈サットヴァ〉〈ラジャス〉〈タマス〉²³の三グナが人の行為にどのように関係しているのか、これについて次のように説かれている。

常に執著を離れ、貪欲・憎悪なく、果報を求めない者によってなされた行為、それはサットヴァ性であると言われる(18.23)。しかし、欲望を求める者に

²² グナとその関係語。【guṇa 3.5, 3.27, 3.28, 3.29, 4.13, 7.13, 7.14, 13.14, 13.19, 13.21, 13.23, 14.5, 14.18, 14.19, 14.20, 14.23, 14.25, 14.26, 15.2, 15.10, 18.19, 18.29, 18.41】関係語とは、複合語を含むその語の名詞、形容詞、動詞および分詞などである。類語は含めていない。これは BhG 全文中におけるグナに関する用例の偈番号であるが、ここでは紙幅の関係上、すべての用例を提示した考察は難しいため、この中から適する用例を選んで用いる。以下の【】内も同様の趣旨によるものである。

²³ サットヴァ、ラジャス、タマスとその関係語。【sattva 2.45, 7.12, 10.36, 10.41, 13.26, 14.5, 14.6, 14.9, 14.10, 14.11, 14.14, 14.16, 14.17, 14.18, 16.1, 17.1, 17.2, 17.4, 17.8, 17.11, 17.17, 17.20, 18.9, 18.10, 18.40, 18.20, 18.23, 18.26, 18.30, 18.33, 18.37】【rajas 3.37, 6.27, 7.12, 14.5, 14.7, 14.9, 14.10, 14.12, 14.15, 14.16, 14.17, 14.18, 17.1, 17.2, 17.4, 17.9, 17.12, 17.18, 17.21, 18.8, 18.21, 18.24, 18.27, 18.31, 18.34, 18.38】【tamas 7.12, 8.9, 10.11, 13.17, 14.8, 14.9, 14.10, 14.13, 14.15, 14.16, 14.17, 14.18, 17.1, 17.2, 17.4, 17.10, 17.19, 17.22, 18.7, 18.22, 18.25, 18.28, 18.32, 18.35, 18.39】

よって、また我執ある者によって、多くの苦勞をもってなされるその行為、それはラジャス性と説かれる（18.24）。結果、損失、傷害、また能力を顧みず、迷妄の故に企てられる行為、それはタマス性であると言われる（18.25）。行為者についても、

執著を離れ、自負心なく、堅固と努力とを具え、成功と不成功のいずれの場合にも不変なる行為者は、サットヴァ性であると言われる（18.26）。染著に満ち、行為の果報を求め、貪欲、殺生の性質あって不浄、喜憂に伴われた行為者は、ラジャス性であると称される（18.27）。心統一せず、下劣、頑迷、狡猾、欺瞞、怠惰にして無気力で、緩慢なる行為者は、タマス性であると言われる（18.28）。

と説く。このようにグナは万物の性質を表すときにも用いられ、サットヴァから順次に道徳的に劣化しているのがわかる。行為に関してサットヴァは次のようにも説かれている。

サットヴァに満ちた、聡明な、疑惑を断ち切った放棄者は、不善な行為を憎まず、また、善〔なる行為〕にも執著しない（18.10）。

執著を離れて行為することがサットヴァに安立して行為することであり、執著を持って行う善行を否定する。あくまで執著の厭離が行為における前提となっている。そのため「サットヴァに基づいてあれ」（2.45）と説くが、同じ偈文で「三グナを離れよ」とも説かれている。

次に、ラジャスについてである。人が悪行をなす原因に、このグナが関係している。

アルジュナは言った。それでは、この人間というものは何に駆り立てられて、罪悪をなすのか。望みもしないのに、あたかも強力に強制されたかのように（3.36）。聖なる至尊は言った。これは欲望である。これは怒りである。ラジャス・グナより生じ、大食にして大邪悪である。これをこの世における敵であると知るべし（3.37）。火が煙によって覆われ、また鏡が塵によって〔覆われ〕、胎児が羊膜によって覆われるように、そのように、それ（欲望、怒り）によって、これ（知、N 註）は覆われる（3.38）。知ある者の知は、その永遠なる敵によって覆われている。欲望の形をとって、また満たし難い火

によって (3.39)。諸感官、意 (manas)、知性 (buddhi) はその依処と言われる。これ (永遠の敵＝ラジャスより生じる欲望と怒り) は、これら (感官、意、知性) によって知を覆って、個我 (dehin) を迷乱させる (3.40)。それ故に、汝は最初に諸感官を抑制して、かの叡知と識別知とを破壊する邪悪なるものに打ち勝つべし (3.41)。諸感官は、高いものであると人は言う。意は諸感官より高いものである。しかし、知性は意より高い。しかし、それ (アートマン) は、知性より高い (3.42)。このように [アートマンを、N 註] 知性より高きものと覚知して、アートマンによってアートマンを抑制して、欲望の形をとる近づき難い [危険な] 敵を打倒せよ (3.43)。

欲望と怒りが人に悪行を行わせ、この両者は「ラジャス・グナより生じる」(3.37) のものであり、「諸感官、意、知性がその依処」(3.40) となっている。ラジャスを厭離する対処法として、諸感官から意、知性、アートマンへと順次確立させる心統一の方法がとられている (3.41～43)。これを逆方向に適用すると次のようになる。

活動器官 (作根) を抑制して [いるにも関わらず]、諸感官の対象 (感官を刺激するもの) を意によって憶念しつつ坐す、アートマンの迷乱せる者、その者は悪行の者と言われる (3.6)。人が感官対象を冥想すると、それら (感官対象、N 註) に対する執著が生じる。執著から欲望が生じ、欲望から怒りが生じる (2.62)。怒りから迷妄が生じ、迷妄から憶念の混乱が [生じる]。憶念の混乱から知性は損失し、知性の損失により、人は滅亡する (2.63)。

以上のことから、欲望と怒りがラジャスを厭離しない者の特徴であることがわかる。また、グナは二元の本源である至尊の保持するものであるが「われがそれらに [依存して在る] のではなく、それらがわれにおいて [在る] のである」(7.12) という。しかし「人中の最悪なる人々、悪行の者たち、迷乱した者たちは、幻力によって知を運び去られ、阿修羅性の状態に依止し、われに來たらず」(7.15) と説かれている。阿修羅性について「神性は解脱に導き、阿修羅性は束縛に導く」(16.5) つまり、解脱に至らないということである。

阿修羅性の者の行為については次のように説かれている。

阿修羅性の人、行為肯定 (pravṛtti) も行為否定 (nivṛtti) も知らず。清浄

なく、また善行もなく、真実も彼らに存在しない (16.7)。彼らは言う、世界は真実なく、不安定であり、自在主なく、相互関係 (paraspara) によって生じるものではない。欲望を原因とするもの以外に何が〔存在する〕だろうか (16.8)。この見解に固執して、アートマン (自己) を滅ぼす知性少なき者たち、凶悪な行為をなす有害な者たちは、世界の破壊のために出現する (16.9)。満たし難い欲望に依止し、偽善・高慢・放逸に伴われた、不浄なる慣習をもつ者たちは、迷妄の故に虚偽の見解を執って行動する (16.10)。はかり知れない、また破滅に至る思考に依止し、欲望の享樂に没頭し、これあるのみと確信し (16.11)、百もの期待の繩に捕らえられ、欲望と怒りに没頭する者たちは、欲望の享受のために、不正によって財産の蓄積を企てる (16.12)。

以下さらに阿修羅性の者の行為の特徴が列挙され、次のように締めくくられる。

欲望・怒りおよび貪欲、これは、アートマン (自我) を破壊する奈落の三重の門である。それ故に、この三つを放棄せよ (16.21)。

これら暗黒の三門より解放された人は、アートマン (自我) のために至福を修め、それにより最高の境界に至る (16.22)。

このように、阿修羅性の者が道徳的にも悪しき行為を為す者であることがわかる。特に、欲望、怒りはラジャスから生じるものであったが、「虚偽の見解を執って行動する」原因となる迷妄もタマス²⁴に起因するものであった。阿修羅性の者を支配しているグナがラジャスとタマスであることがわかる。また、神を憎悪するのも彼らの特徴となっている (9.11, 16.18)。

行為否定の倫理の実践について金倉は「人間存在の苦悩、無常性、隷属性を脱却し、何等の動揺をそれらから受けない心の平静を獲得するにある」。その際、「ヨーガ (心統一) の実修は、有効な補助をなす」と述べている²⁵。それは BhG でも同様である。行為を実行すれば、その結果として果報が生じる。行為の果報 (業果) に執著をもつか否かが、輪廻に個我を束縛する業の作用を受けるか

²⁴ タマスに関する行為については、本文に提示した用例以外に取り挙げるべき用例は見当たらなかった。

²⁵ 金倉「インドの倫理」80頁参照。

どうかの分かれ道になっているようである。「心統一する者は、行為の果報を放棄して、究竟の寂靜に到達する。心統一しない者は、欲望の作用によって果報に執著し束縛される」(5.12)。このように、果報に執着しない者が心統一する者として説かれている。そして、「行為の果報への執著を放棄して、いつも満足している人、〔他に〕依存することのない人は、行為に従事しても、実に彼は決して行為していないのである」(4.20)と、その行為は無作となることがわかる²⁶。

次に平静の観点から検討する。平静を「業の束縛から解放され、解脱を得た安閑の境地」としたが、〈解脱〉²⁷について BhG では次のように述べている。

感官・意・知性を抑制し、常に願望・恐れ・怒りを離れた、解脱に専念する牟尼、その者は、まさしく解脱した者である (5.28)。

田と知田²⁸との、このような相違を、また万物の根本原質からの解脱を知眼によって知る者たち、彼らは最高なるもの (para) に到達する (13.34)。

個我 (dehin) は、肉体を生じるこれらの三グナを超越して、生・死・老・苦より解脱し、不死 (amṛta) を享受する (14.20)。

何からの解脱か、それは根本原質からの解脱である (13.34)。抑制されるべき「感官・意・知性」とは欲望と怒りを生じさせるラジャス・グナの依処 (3.40) となっていた。また「すべての行為は、根本原質のグナによって行われる」(3.27) という。そのため、解脱には根本原質より生じるグナからの厭離が必要であることがわかる。このグナからの厭離に平静の観念が見られる。

アルジュナは言った。どのような特徴を具えることによって、これらの三グナを超越した者となるのか。どのように行動し、また如何にしてこれらの三グナを超えるのか (14.21)。聖なる至尊は言った。光明と活動と迷妄²⁹とを、その既に起こったことを憎まず、その終わったことを求めず (14.22)、中立者の如く坐しつつ、グナによって動揺させられない者、グナが転現するのみ

²⁶ 同様の用例は、4.19, 4.21, 4.22, 5.7, 5.10 に表れる。ここから欲望、願望、羨望を離れること、無所有、相対の超越、成功・不成功に平等であること、これらを業に束縛されない行為の徳目、つまり厭離の徳目として挙げることができるだろう。

²⁷ 解脱とその関係語。【mokṣa 4.16, 5.28, 7.29, 9.1, 9.28, 13.34, 17.25, 18.30, 18.66】

²⁸ 田 (kṣetra) は物質原理、知田 (kṣetrājña) は精神原理を指す先古典サーンキヤ説における有名な用語。「肉体は田」「これを知る者は知田」(13.1) であり「田およびその変異」として 31 の原理が挙げられている (13.5~6)。

²⁹ いずれも三グナの特徴。

であるとして動じず、安立する者（14.23）、苦・楽を平等視し、自己に安立し、土石・黄金を平等視し、好ましきものと好ましからざるものとを同一とし、賢明にして、非難・自己に対する称讃を同一であるとする者（14.24）、尊敬と軽視において同一、敵と友の両方において同一、一切の意図を放棄する者、彼はグナを超越した者と言われる（14.25）。

このようにグナからの厭離を達成した者が、相對の事物を平等（sama）、同一（tulya）に見る者であることがわかる。この〈平等〉³⁰という平静の境地については次のように説かれている。

意が平等観（sāmya）に安立した者たち、彼らによって実にこの世における出生は克服されている。なぜならば、梵は欠けることなく平等だからである。それ故に、彼らは梵に安立する（5.19）。

すべてにわたって平等を観ずる者は、アートマンを一切万物に内在すると〔見〕、また、一切万物をアートマンにおいて見る（6.29）。

それは個我と本来同一の至尊を見ることでもある。

われを一切所に見、また一切をわれにおいて見る者、彼にとりわれは失われず、彼もまたわれに失われず（6.30）。

同様の見解は 9.29 にも見出される。また、「〔生命我と梵との、N 註〕一如観（ekatva）に安立し、一切万物に内在するわれを敬信する者、そのヨーガ行者は、どのように行動しても、われの中で行動しているのだ」（6.31）という。このように、グナを厭離して得られる平等観は、万物一如を識得し、梵や至尊と同じ平静の境地に安立することである。信仰と行動倫理の結合をここに見出すことができる。そして「ヨーガに安立し、執着を放棄して、成功・不成功に平等となって行為を実行せよ。平等観（samatva）がヨーガと言われる」（2.48）とあるように、厭離と平静の二観念を持って行為することが BhG における行為の実行の前提条件となっている。

³⁰ 平等とその関係語。【sama 2.15, 2.38, 2.48, 4.22, 5.18, 5.19, 5.27, 6.7, 6.8, 6.9, 6.13, 6.29, 6.32, 6.33, 9.29, 10.5, 12.4, 12.13, 12.18, 13.9, 13.27, 13.28, 14.24, 18.54】

4. まとめ

以上、『マハーバーラタ』の四つの倫理の視点から、調和の構造（厭離および平静を土台とした行為の実行）を導き出し、BhGにおいてこれが如何に見出されるか検討した。四つの倫理はそれぞれ行為（業）への対処の違いから導き出される。厭離は業の束縛から離れること、平静は業の束縛を脱した境地である。これをBhGの用例において確認した結果、個我を業により束縛するのは、万物の物質的な根源である三つのグナである。グナを厭離の対象として挙げることができる。道徳的な善悪にもこのグナが関わっている。一方、平静はグナを厭離して得られ、梵や至尊の境地と等しい心境に安立することである。それは解脱を得た境地であり、平等観や一如観とも表現されている。このようなものとして、BhGの行動倫理に厭離と平静とが表れている。これは一部の用例において得られた結論であるが、今後、調和の構造に照らしてBhG全編にわたる検討を行うことは可能と考えられる。『マハーバーラタ』の縮図とされるBhGにはどのような行為が重んじられ、その規範となっているのは何か、さらに検討していく必要があるが、これについては機会をあらためて論じたい。

キーワード：

マハーバーラタ, バガヴァッド・ギーター, 『マハーバーラタ』の倫理, 調和の構造, グナ

Keywords :

Mahābhārata , Bhagavad-gītā , Ethics of Mahābhārata , Structure of the harmony , Guṇa